

日本の社会学者が捉えた オルテガ・イ・ガセットの特徴

—1950年代、大衆社会論との関連で—

小 山 義 博

1. はじめに

本稿では、日本の社会学者が哲学者であるオルテガ・イ・ガセットをどのように捉えていたのかを1950年代に注目して明らかにする。それは、この時期に『大衆の反逆』（以下『反逆』）の翻訳出版（1953年）と欧米の大衆社会論（輸入理論・カタカナ大衆社会論）の導入、それを日本社会に当てはめた大衆社会論争（以下、論争）など大衆社会論が隆盛した時代だからである。しかし、オルテガ受容の先行研究では、同時期の社会学者がどのような観点からオルテガを捉えていたのかは分析対象となっておらず、社会学の分野ではない研究者らによってオルテガは“社会学者”や社会学の観点から書かれた『反逆』の著者として紹介され扱われていたことが明らかにされていた。

そこでまず、大衆社会論でのオルテガの位置づけと日本におけるオルテガ受容の特徴を示したあとで、1950年代の社会学者らによるオルテガの扱い方に注目する。その分析方法としては、各社会学者らの論稿においてオルテガがどのような文脈で言及されていたのかを読み取るとする。その対象時期は、大衆社会論の基本的論点を示した清水幾太郎の「新しい群集」が発表された1951年から論争が〈破産宣告〉によって終了した1960年までとする。そこで明らかになった特徴として2つ、まず、日本型大衆社会論が確立したとされる論争ではオルテガは争点とならず、それ以前の〈輸入理論〉の段階で論者の大半が『反逆』に基づいて扱っていたこと、そして、マンハイムと関連して言及されていたことを指摘する。

2. 大衆社会論でのオルテガの位置づけ

オルテガは本来哲学者であるが、『反逆』の出版によって大衆社会論の

いち論者としての側面が特に際立っている。

まず、大衆社会論が説明される際、その分析対象と時代から2つに分けられる。1つ目が、戦前のファシズム下での大衆の社会心理を分析したヨーロッパの大衆社会論であり、コーンハウザーの貴族主義的批判と民主主義的批判の2分類が言及される。そして、オルテガはル・ボンやマンハイムらとともに前者に分類される。2つ目は、戦後1950年代の豊かな消費社会の成立に伴う大衆の社会心理を分析したアメリカの大衆社会論であり、ミルズとリースマンに言及される(三上 1986:74-8, 片桐 2011:79-80, 109; 出口 2017:112-5)。片桐雅隆によると、コーンハウザーの2分類は構造の観点から同様の特徴であった。つまり、人間は媒介的關係(家族・近隣関係・職場・クラブ・組合など)の解体に伴う社会の原子化によって不安感や疎外感を抱き、その緊張から逃れるために極端な行動に逃避するということであった(片桐 2011:80)。その一方で、アメリカの大衆社会論については、A・スウィングウッドの「多元的民主主義としての大衆社会」と「全体主義としての大衆社会」を示し、後者がコーンハウザーの民主主義的批判に対応し、前者は産業化・科学技術の上に実現された豊かな社会を示し、原子化・全体主義化のペシミスティックな大衆社会論とは対照的と説明している(片桐 2011:79-80)。

片桐は、コーンハウザーによる大衆社会の規定が大衆社会論の定番になったと指摘する(片桐 2011:80)。だが、『大衆社会の政治』([1959]1962)以前の日本では、綿貫譲治が分類しており、ヨーロッパの大衆社会論に対しては「危機における大衆化」と、アメリカの大衆社会論には「常態における大衆化」と規定している(綿貫 1957:32-3)¹⁾。しかし、綿貫はその全体としての特徴に当てはめた各論者にオルテガを含めていない²⁾。また、西村勝彦は大衆社会論者をその立場と時代を拡大して3類型しており(西村 1958:44-58)、オルテガは1つ目の「貴族主義的、あるいは保守的・カトリック論的もしくは非歴史的立場」のうちさらに3分割された「(ハ)貴族主義の立場から大衆社会のみならず民主主義そのものをも否定する」論者に分類している(西村 1958:48)。いずれにせよ、オルテガは貴族主義的な立場に位置付けられる。

これらの位置づけは、オルテガ自身が『反逆』内で貴族主義的な立場であると断りを入れているため(Ortega [1930]2010:382)、そのイメージが容易に固定化されているともいえる。

3. 日本におけるオルテガ受容

筆者は、日本におけるオルテガ受容について先行研究を紹介しつつ検討を加えた(小山 2019: 109-12)。まずオルテガは、1930年代初頭にドイツ(語・哲学)経由で「生の哲学」の分野の哲学者として受容された。そして、Tanaka, Satokoの指摘を踏まえ、『反逆』の翻訳出版によって、その哲学概念である<生の理性>(razón vital)³⁾が捨象され、また同時期に出版された「生の哲学」にかんする概説書がオルテガを扱わなかったため、社会学者としてのイメージが定着した(Tanaka 2007: 117)⁴⁾。しかし、Tanakaが本文中で引用し、オルテガを社会学者や『反逆』の著者として紹介した学者たちは社会学者ではなかった⁵⁾。つまり、社会学の分野ではない研究者によってオルテガは社会学者、あるいは社会学の観点から書かれた『反逆』の著者として紹介されていた。したがって、社会学の分野の研究者らがオルテガを、どのように捉えていたのかを明らかにすることが課題であった。むしろ社会学者によるオルテガ思想の分析については、木下智統によって日本語版『反逆』が時間を経るに哲学者だけでなく社会学者たちをも議論の場に導いたとし、1971年に出版された『世界の名著』シリーズ、第56の「マンハイム・オルテガ」で解説を行った高橋徹と、藤竹暁の『大衆政治の社会学』(1990)をとりあげ、オルテガ受容が進んだ分野として社会学をあげた(木下 2014: 152-8)。

しかし、日本語版『反逆』の出版が時期を経るに哲学者だけでなく社会学者をも俎上にあげたことに対して、言及した社会学者が2人であつ時期(1971年と1990年)も関連性が低いといえる。また木下は、樺俊雄が『反逆』の翻訳を西村がすでに行つたものに手をくわえ(樺 1953a: 258)、樺ひとりの名義で出版したことについて、西村が社会学者であり哲学に精通していないために樺に託したと推測している(木下 2012: 136、傍点筆者)。この点からも、木下は社会学の分野でのオルテガ受容に時間がかかるものと判断していると考えられる。

確かに、オルテガ作品の翻訳者や先行研究で扱われた論者たちのなかに社会学者は少ない。しかし、兒玉幹夫がいうように、1950年代は日本で大衆社会論が成立した年代であり、欧米の大衆社会論の翻訳出版が相次ぎ、各誌でも特集が組まれているため(兒玉 2002: 37-9)、木下の指摘を待たずともオルテガへの接触は哲学の分野より社会学の分野の方が容易と考え

られる。したがって、Tanakaの指摘も踏まえて日本のオルテガ受容の特徴をより検討するためにも、社会学者が同時期にトピックとなった大衆社会論との関連からどのようにオルテガを捉えたのかを見ていくとする。

4. 1950年代でのオルテガの捉えられ方

4.1 大衆社会論争から社会学者による大衆社会論へ

では、論争からオルテガを紐解いていくとする。論争は、1956年暮れから1960年にかけて政治学系統の大衆社会論者（主に松下圭一）とマルクス主義者（主に芝田進午や上田耕一郎）の間で各誌上（主に『思想』と『中央公論』）・各著作上で繰り広げられた。概して、戦後の日本社会・政治・階級、それぞれの構造変化を、イデオロギー的要素をはらみつつ分析した大衆社会論の提示であった⁶⁾。しかし、論争の概要・分析については優れた論稿があるし（加茂：1973；林：1977；三上：1986）、紙面と本旨の観点から各論者の論稿を詳細に分析することはせず、時代背景のみを記すとする。それは、論争を繰り広げた論者たちの主論稿ではオルテガについて言及はなく、マルクス主義側からオルテガの貴族主義的な立場を批判する論調も見られないからである⁷⁾。

背景としては、ソビエト共産党第20回大会（1956年）でのスターリン批判とハンガリー動乱直後の思想的混迷期と、時期を同じくして日本では共産党第6回全国協議会（六全協）後の方向性の模索とあいまって、マルクス主義の人気低迷、二大階級闘争や革命の論理がもはや成り立たず、マルクス主義批判とその克服として「大衆社会」という言葉がこのような時代の性格を斬新な感覚で捉えるものとして、リベラリストたちに歓迎され、時局に便乗していった（辻村 [1967]1968：12；西村 1958：6-7；林 1977：133）。だが、つづけて辻村もいうように（辻村 [1967]1968：12）、当事者の松下は、こうした背景とは関係なくそれ以前（1954年）に理論的骨子を発表していたのであった（松下 [1959]1969：280-1）。論争自体について梅沢孝は、それ以前よりそもそも大衆社会論での大衆概念の扱われ方について疑問を呈し（梅沢 1955）、数年後に起こる論争でその疑問が現実のものになったことについて再度言及している（梅沢 1958, 1959）。梅沢によると、論争は各論者のイデオロギーに都合のよい大衆現象をとりあげてマルクス主義的、社会心理学的、社会学的分析を適用して「大衆」現象の総合的把握を困難にしていると指摘し、各自の概念ではなく、より明

確で普遍的な概念の再構成を呼び掛けている(梅沢 1958 : 1)。そもそも梅沢の根底には、近代化により社会が平均化した量的な意味でのマス・ソサエティでの「マス」(mass)と労働者階級を中核として出現した階層的・疎外的性格を持った特殊社会集団としての「大衆」(masses)がきちんと区別されておらず混乱を生じ論争を呼んでいるとのことであった(梅沢 1958 : 2)。

いずれにせよ、論争参加者は政治学やマルクス主義者であり、前述のようにオルテガは争点になってはいなかった。したがって、社会学者たちがどのような観点からオルテガを捉え、それが50年代を通してどのように共有・継承されてきたのかを概観する。

4.2 論争同時期に社会学者が捉えたオルテガの特徴

先行研究では、『反逆』の翻訳出版によって各論者がオルテガを哲学者から社会学者として捉えたことが指摘されたが、言及された論者は社会学者ではなく、また同時期の社会学者らによるオルテガへの言及は対象になってはいなかった。したがって、同時期の社会学者がオルテガをどのような観点から捉えていたのかを見ていくとする。

新明正道は大衆社会論について述べる際に、オルテガを貴族主義的な論者ゆえに分析から外している。その理由は、新明にとってはマンハイムの考えが大衆社会論の<正統>であった。それは、(正統な)大衆社会論が大衆の成立を大衆民主主義の肯定と発展に結び付けて考察しており、このスタンスを踏襲・目標としている点に魅力を感じていたからである(新明 1957 : 10)。つまりこの点から新明は、マンハイムも貴族主義的批判の論者に位置付けられるとはいえ、オルテガには<正統な>大衆社会論の視点は無く、文字通り「貴族的」な観点ゆえに肯定的には捉えていない。また、芥川集一はオルテガの定義する社会(エリートと大衆による統一体)を説明したうえで、大衆の台頭に対して貴族的な考えから警鐘を鳴らしたと、その立場の説明を試みている(芥川 1957 : 67-8)。しかし梅沢は、それがもはや貴族主義的ペシミズムと述べ(梅沢 1959 : 3,5)、新明と同様の立場といえる。

その一方で阿閉吉男は、現代社会が分業の発達と専門化の進展による形式的合理性と非合理性の自己矛盾をはらむなかで、大衆的人間という理念型を示した『反逆』を引用し、大衆的人間の台頭や、その形成の歴史的要

因、そしてエリートに付する貴族主義的な立場を説明することで、オルテガの概念を質の観点から仔細している(阿閉 1958 : 280-1)。ここで阿閉は、他の論者とは異なり、オルテガが大衆の人間概念をすでに1923年に示していることを指摘した。その特徴については、創造的な人間に対する好意や反抗という受動的なふるまいであり、かつ、オルテガが歴史のなかに、偉人(エリート)と大衆による「本質的な二元性」を見出しているとのことであった(阿閉 1958 : 281)。ここで阿閉が引用した1923年の著作は『現代の課題』(以下『課題』)であるが、そこでの大衆的人間は <masas humanas> であり(Ortega [1923]2012 : 563)、『反逆』でオルテガが危険視した大衆的人間(hombre masa)ではない。確かに、オルテガは大衆(masas)という概念を早くから示しているが⁸⁾、社会に台頭してきた大衆的人間(大衆人)は『反逆』ではじめて提示された概念である。つまり、阿閉が『反逆』での大衆的人間の補足として捉えた『課題』の大衆的人間は、むしろ質的な側面での大衆であり、まだ社会に台頭し反逆する側面は持っていないといえる。そして阿閉は、世界大恐慌をきっかけとして大衆的人間に対する関心が一般に流布され、オルテガがふたたび警鐘を鳴らすに至ったと、すでに示した『反逆』の説明を続け(阿閉 1958 : 281)オルテガの炯眼さを暗に示している。

その一方で梅沢は、前述したように大衆社会論に疑問を呈したわけだが、オルテガをワースヤリースマン、マンハイムらとともに、凝集性を持たない分化した人々の大量としての大衆(マス・ソサエティでの「マス」)を捉えた論者に位置づけている(梅沢 1958 : 14)。それに加藤秀俊は、オルテガやシュベングラールの大衆観が「昔はよかった」という後ろ向きの姿勢である点を欠点としている(加藤 [1957]1965 : 92)。

その一方で沼 義昭は、論争とも関連させながらオルテガについて言及している。まず、大衆社会が大衆の台頭による市民社会からの転化を、『反逆』の冒頭を引用することでその根拠とし、大衆社会論が社会学に定着したことを述べている。そしてオルテガの大衆概念については、現状に満足する平均人を、向上心を持つエリートに対置しており、精神的貴族主義の立場として紹介している(沼 1960 : 62, 65, 82)。

こうした社会学者らによる言及はその随所で、マス・コミュニケーションやマス・メディア、階級、大衆デモクラシー、そして大衆・消費社会などの観点からル・ボンやタルド、マンハイムらその分野の論者の諸説、系

譜を紹介する際にオルテガをその1人として説明がされていることから、1950年代の大衆社会論の隆盛に関連しているといえる。くわえて、そのイメージ（貴族主義的、一連の説明、大衆概念）は『反逆』の内容によるところであるため、〈生の理性〉概念を捨象した社会学者としての捉え方への変化というTanakaの指摘に符合し、かつ社会学者のなかに見出すことができる。

4.3 論争（日本型大衆社会論）以前（カタカナ大衆社会論）でのオルテガの捉えられ方

では、論争以前でのオルテガの捉えられ方を見ていくとする。兒玉は、清水の「新しい群集」（1951）がのちに展開される大衆社会論の基本的論点を大筋で示しているとし、本誌を日本の大衆社会論の出発点と位置付け武田良三を続けている（兒玉 2002：27, 29）。しかし、清水はオルテガに言及しておらず（清水 1951）、武田はリースマンの説明にとどまっている（武田 1954）。その一方で、佐藤智雄はエリートと大衆を対置しているが、マス・コミュニケーションの観点からマス・メディアの〈与えて〉としてのエリート（狭義のインテリゲンチア・政治家・実業家・高級官僚）とく受け手〉としての大衆、その大衆がマス・メディア（エリート）に威信を与え後者が権威を持ったことで両者の間に距離が生まれたとする大衆の非人格性・匿名性の説明であり（佐藤 1954：5-6）、オルテガのエリートと大衆ではないし言及もない。

このように、兒玉は日本の大衆社会論の出発点を清水（1951）に位置づけたが、その成立は梅沢（1955）に位置づけている（兒玉 2002：37-8）。この点について論争を扱った各論者によると、争点となった内容を日本型の大衆社会論と位置づけ学術的なトピックとし、それ以前の大衆社会論は〈翻訳理論〉や〈カタカナ大衆社会論〉と位置付けている（松下：[1959] 1969：294-5；青木 1982：2-3；三上 1986：78）。

論争の社会的背景は前述のとおりであるが、日高六郎が戦前・戦後の日本社会の構造変化について、前近代から近代、近代から現代（大衆社会）という二重の転回を特徴とすることかも、前近代から現代という転回も成立し、公衆（市民社会）から大衆（大衆社会）を前提とした欧米の大衆社会的アプローチが日本社会には適用困難であると指摘している（日高 [1957]1965：244）。この点は松下によるところであり、日本社会が近代と

現代を内包し欧米では数百年かかった発展段階を機械的に適用できないからこそ、松下が試みた大衆社会論の課題のひとつが、大衆デモクラシーという形態をとったファシズム成立の危機の状況究明であった（松下：[1959]1969：283,311）⁹⁾。この松下の問題意識について論敵の上田は、前述の綿貫の分類を援用し見解を述べている。まず、1950年代の日本社会に「常態」における民主主義の空洞化と「危機」における民主主義の破壊を読み取って、その<二重化>（アメリカの大衆社会化とナチスドイツの大衆社会化）という懸念・危機感を融合した考えであった。そして、この考えが「体制・反体制」という視点と結びついたことで、日本の大衆社会論を欧米のそれと区別し、大衆デモクラシーに対して反ファシズムの立場から批判的な視点を与えるきっかけとなった（上田 1960：16）。

このように、論争では欧米の大衆社会論が意識されつつも、大衆社会論対マルクス主義というイデオロギー対立が日本の大衆社会論の特徴であった（沼 1960：81）。つまり、欧米の大衆社会論は論争以前より日本に紹介されてはいたが（青木 1982：2；三上 1986：78；）、日本社会に適応した大衆社会論の成立は論争においてであるため、それ以前の<翻訳・カタカナ大衆社会論>でオルテガを見ていくとする¹⁰⁾。

梅沢は論争時にそのあり方に疑義を呈したが、それ以前より大衆社会論について言及しオルテガを引用している。また、前述した梅沢の見解、つまり、近代化により社会が平均化した量的な意味でのマス・ソサエティでの「マス」(mass)と労働者階級を中核として出現した階層的・疎外的性格を持った特殊社会集団としての「大衆」(masses)の考えは論争以前より提示されている（梅沢 1955）。この点については兒玉も、梅沢（1955）を文明評論的になりがちな大衆社会論に対して、マス・ソサエティでのマス概念と特殊社会集団としての大衆概念を峻別する必要を説いた点に、概念レベルでの議論を提起したと評価している（兒玉 2002：38）。そもそも、梅沢は特殊社会集団としての大衆を分析対象としており、オルテガについては量的な意味でのマス・ソサエティでの「マス」を扱った論者として位置付け、エリートに対する大衆として平均人（化）でありマス・ソサエティ論の先駆だが特殊社会集団としての大衆ではないと指摘し、これにマンハイムが続いているとした（梅沢 1955：1-2, 12）。つまり、梅沢にとってはオルテガの分析はあまり魅力がなかったといえる。したがって、大衆の誕生について梅沢自身はどの時代にも普遍的に存在する「歴史偏在

論」の立場であるが、現代特有の特徴とする「現代発生論」の立場のうちマス・デモクラシー論の立場に松下を、マス・ソサエティ論の立場に権を分類していることから（梅沢 1958：14）、オルテガと同じ立場ゆえに権がオルテガに傾倒することが判断できる。

権については、先行研究で『反逆』の翻訳者としてのみ扱い、その「あとがき」の分析がなされたが、翻訳以前からオルテガを認識していたのは確かである。権はオルテガを1930年代初頭より哲学者として認識してきたが、大衆論としてのオルテガを捉え論考として寄稿するのは『反逆』の翻訳出版と同時期である。そして、大衆論について扱う他の著作であってもオルテガへの言及がない場合もあるが、オルテガの大衆概念が量的拡大と質的特徴を持っている点で公衆と異なっていることを説明した（権 1953b：10、表1）。

つまり、Tanakaの指摘する〈生の理性〉概念を捨象した社会学者としての捉え方への変化は、権に限れば『反逆』のみの判断ではなく、継続したオルテガ受容のなかで大衆社会論としての側面もあるという多面的な捉え方であったといえる。木下は、権がオルテガの大衆社会批判にみる叡智ぶりに驚嘆し、当時の日本社会（1950年代）の現状と照らし合せても『反逆』が効力のあるものであったと、権が翻訳したことを評価しており同様の視点はTanakaにもみられる（木下 2012：136；2013：96；Tanaka 2007：114-5）。また権自身は「あとがき」で、『反逆』が現代を大衆社会と規定したうえで様々な角度から大衆を分析した最初のまとまった書籍であると

表1 権に見るオルテガ受容の変遷

出版年	題名	オルテガの捉え方
1934年	「歴史と世代（上・下）」	〈世代〉概念を提示した哲学者
1942年	「歴史哲学—読書案内」	歴史哲学者
1947年	『世界観の社会学』	〈生・理性〉の分野の哲学者
1948年	『輿論の社会学』	オルテガへの言及なし
1952年	「大衆社会と輿論について」	オルテガへの言及なし
1953年	『大衆の反逆』 翻訳出版	大衆論としてのオルテガ
	「輿論・公衆・大衆」	大衆論としてのオルテガ
1955年	「大衆—この怪奇なるもの」	エリートと大衆の分類を批判

筆者作成

評価し、充満の様子(量的な側面)から質的な人間類型(エリートと大衆)の説明、努力をしない大衆が社会に台頭する大衆社会批判の説明ののち、オルテガがすでにファシズム・共産主義・ヨーロッパの統一・ヨーロッパとアメリカの関連・科学の専門主義の危機といった今日にも通じる諸問題に対処してきた点に炯眼さを見てとり、最後にオルテガの経歴を簡単に紹介している(樺 1953a : 255-8)。

もちろん、樺に翻訳を託した西村も同時期にオルテガに言及している。西村は論稿を始めるにあたり、現代社会が大衆社会である根拠を『反逆』の冒頭に求めオルテガを紹介する。つまり、ル・ボンやシゲールが民衆(群集)の政治分野への台頭に危機感を持ち、それを群集の歴史的特徴ではなく心理学的に分析した一方で、オルテガがそれ以前の19世紀の民主主義を称賛し、エリートの支配的地位を脅かすマスの歴史的力に対する不信を読み取った論者としてであった(西村 1953b : 2-3, 5)。

一方で阿閉も、論争時期にオルテガについて言及した内容はそれ以前から捉えていた。阿閉は、現代社会が分業の発達と専門化の進展がはらむ合理性と非合理性の自己矛盾を抱え、マンハイムとキンボール・ヤングを引用しながら、現代社会が孤立化した個人から成る大衆社会の特徴のもとでは、形式的には合理的ではあるが実際はその発展により実質的な非合理性がみられると述べている。ここで阿閉はオルテガを引用するが、科学者が専門人としては合理的に判断し行動するが、一般人としては教養をもたず非合理的に判断し行動する「教育のある無知」が当てはまり、科学者に対して「目標なしに生活して、風のまにまに流される人間」という「大衆的人間」となづけたのも理由がありオルテガを評価している。つまり、科学が科学者を「大衆的人間」にしているため、合理的な科学が科学者としての非合理性を生んでいる形式的合理性の原則を表しているとのことであり、阿閉自身はそのような人間類型を「部分的人間」とした(阿閉 1955 : 200-2)。

このように阿閉は、梅沢がオルテガをマス・ソサエティでのマス(mass)という量的な意味で社会を動的で巨視的な立場で扱った論者に位置付けた一方で、そのような社会が抱える合理性と非合理性の自己矛盾のうちに現れた人間類型という個人の内面を捉えた提唱者としてオルテガを紹介している。しかし阿閉は、大衆社会での人間が第一次集団がもつようなパーソナルな安定性を失い、孤独となり、不安感を抱くようになり、大衆的人

間は目標なしに生活して、「風のまにまに流される人間」とオルテガを引用した(阿閉 1955: 211)が、むしろオルテガは、大衆が不安を抱かずに他人と同じことに酔いしれている人間である(Ortega [1930]2010: 378)と、大衆という人間類型に孤独や不安感を与えていない。

こうした阿閉の観点から権は、この分業の発達と専門化の進展がはらむ合理性と非合理性の視点も含め同時期に大きく2つの観点からオルテガへの批判を行っている。まず、人間各自がエリートと大衆の二面性をもっているということ。つまり、オルテガのように大衆とエリートを別個の存在ではなく、各自が職業人としてその分野で優れた才能を持つ人でもその他の点では大衆と変わらないという点(権 1955: 9)。2つ目は、大衆はエリートに反逆せずむしろ追従しすぎているという点である。まず権は、エリートをオルテガのような精神的貴族としてのエリートではなく、マス・コミュニケーション(制作者・編集者・アナウンサー・司会者・批評家など)とマス・メディア(営利主義的企業家)に位置づけている。そして、もはやその内容(レベルの高い・低い、卑俗な司会・解説・批評)にかかわらず大衆は無批判的に追従し、判断力を失い卑俗な趣味に踊らされているため反逆とは捉えていない。つまり、平均人としての大衆に付与した反価値的評価はエリートに対しても与えられるべきであり、オルテガが大衆(追従者)とエリート(指導者)に分けたことは今日(1955年)では意味をもたず、エリートを含めた大衆が社会的勢力をもっていることが今日の文化の危機とした(権 1955: 9-10)。

以上のように、1950年代に社会学者が捉えたオルテガのイメージは大きく4つに分けられる。まず、「大衆社会の根拠としての説明」、「貴族主義的な立場」、「大衆が社会に台頭(反逆)することへの危機」、そして、「社会・人間の分類(エリートと大衆)」であった。これらの特徴は、その賛否は別として『反逆』に基づくものでありTanakaの指摘に符合する。また、「マス・ソサエティの論者」や「後ろ向きの文明批判」といった捉え方もあったが、特定の論者のみであった。こうした特徴は、欧米の大衆社会論は論争以前より日本に紹介されてはいたが(青木 1982: 2; 三上 1986: 78)、日本社会に適応した大衆社会論の成立は論争においてであり、そのイデオロギー的特徴からオルテガに言及されずにそれ以前の〈翻訳・カタカナ大衆社会論〉において言及され、その担い手はやはり社会学者であった。

だが、〈翻訳・カタカナ大衆社会論〉の導入の背景については、戦後の民主化と産業発展、マス・メディアの普及から欧米の大衆社会理論の導入があげられるが(三上 1986: 78)¹⁴⁾、この観点は青木のいうように、むしろ戦後のアメリカ社会学の影響が大きい(青木 1982: 2)。つまり、「常態における大衆化」(米型)が導入される根拠となるが、欧型が広まる理由に乏しい。このような米型大衆社会論が導入されやすい大衆社会の到来の一方でオルテガも紹介されたわけであるが、木下はそうした背景について、1950年代の社会学者らは対象ではないが、日本の思想界の人材不足をあげている。木下によると、人材不足が新たな思想への渴望に繋がりそれをオルテガに求め、『叛逆』の訳者らの見解(樺俊雄・佐野利勝)からオルテガが現代(オルテガ同時代)を大衆社会と捉えヨーロッパとアメリカを対象としながらも、原典の出版より20年以上経過した戦後日本の社会情勢と照らし合わせてもその内容に効力があり受容に結びついた(木下 2012: 138; 2013: 95-6)のであった。

ここで木下には、オルテガを受容するに足る具体的な「戦後日本の社会情勢の分析」が見受けられないが、訳者らが『叛逆』の内容に効力があると感じていたことは松下の問題意識に通じるとはいえ、それは米型と欧型の二重化としての日本社会を前者ふたつの理論と分けるためであった。このように、〈翻訳・カタカナ大衆社会論〉の時期が比較的米型が受け入れやすい戦後復興にあっても欧型を受け入れる「懸念」が時代の空気であり、この時期の社会学者がオルテガを捉えるきっかけとしてあげられるのが、欧型のマンハイムとの関連である。

4.4 マンハイムを通してのオルテガ

前述のように木下は、1971年に出版された『世界の名著』シリーズ、第56で『イデオロギーとユートピア』(以下『ユートピア』)と『叛逆』がひとつの書籍として扱われたことに、両者のエリート主義的性格の強い大衆社会論に接点を求め、高橋徹の解説をひも解いている(木下 2014: 154)。そこで木下は、オルテガとマンハイムを結びつけた尾高邦雄をはじめ両者の紹介を行った山口節郎、高橋らがオルテガ研究者ではなく、またその学問領域の哲学でもなく社会学者である点に自身らがオルテガを語る資格が無いことを認識しつつも、社会学者のマンハイムとの関連で詳細に述べられている点にオルテガが社会学の分野で認知されていた証であり、

かつ社会学の分野でオルテガを定着させた書籍として評価している（木下 2014：154-6）。

しかし、木下の指摘を待たずとも、1950年代に社会学者はマンハイムとの関連でオルテガを捉えており、言及される際はマンハイムに影響を与えた人物や同じ系譜、両者の概念の比較として扱われている（西村 1953b：5；1958：19；樺 1955：8-9；梅沢 1955：7,12；佐々木 1956：29,32-3；田野崎 1956：70；新明 1957：10）。

前述のように、樺は社会学者らのなかでは比較的早く1930年代初頭からオルテガを捉えてはいたが、むしろマンハイムの歴史主義や文化社会学の影響を受け自身も社会学の分野へ傾倒していった時期でもあった（樺 1971：5-6）。しかし、この時期にマンハイムとの関連でオルテガについては言及しておらず、1950年代に大衆社会論に傾倒した理由もマンハイムの大衆社会論でありオルテガではない（樺 1971：19）。この点は前掲表1のように、同時期の著作のなかで大衆社会を扱いながらも、オルテガに言及しなかった点とも整合性があるといえる。だが樺は、マンハイムが大衆社会の分析を行うにあたり『反逆』を高く評価しているのも不思議ではない（樺 1955：8-9）と、樺自身の大衆社会論への傾倒はマンハイムの影響ではあるが、マンハイムはオルテガに影響を受けていたと指摘している。

西村は、自身による「大衆社会論者の3類型」でオルテガを貴族主義的な立場に位置付けた一方で、マンハイムを新しい社会への過度的形態を自由主義体制に基づいて捉える社会民主主義の立場に位置づけている（西村 1958：45, 48, 52-5）。この点は、前述の通り新明も大衆民主主義を肯定・前提としたマンハイムが大衆社会論の正統であることに魅了し、オルテガを貴族主義的論者ゆえに対象から外したことから分かる（新明 1957：10）。このように、西村は両者を異なる類型に位置づけているとはいえ、マンハイムが大衆に対して無能力者であり文化を創造することはできないと述べている点は、マンハイムがその強い影響をうけたと思われるオルテガと同然である（西村 1953b：5）と、その類似性を指摘した一方で、大衆を作り出した社会構造との関連で社会的に分析したマンハイムをより評価している（西村 1953a：52）。

田野崎昭夫はマンハイムとオルテガを、阿閉と同じように前者を引用しながら形式的合理性と非合理性の観点から捉え、その結果として大衆が台頭しナチズムやファシズムに利用される存在、またはその擁護者・信棒者

となる大衆の姿に警鐘を鳴らした論者として両者を捉えている（田野崎 1956：70）。

佐々木交賢は大衆を扱った各学者それぞれの定義について、オルテガとマンハイムをふたつの点で同一に扱いながらも、両者の大衆に対するスタンスの違いを比較している。そこでは、両者が大衆の心理的側面に否定的でありながらも、オルテガが量的拡大をもたらした近代を大衆の時代、その特質を社会と個人の均衡化と捉えたのに対してマンハイムは、より社会的な分析でもって近代から現在（マンハイムの時代）への移行のなかで、大衆の流動的な意識を捉えかつ均衡化の喪失を見出している点に違いを示している（佐々木 1956：29, 32-3）。確かに佐々木は、現代が大衆社会である根拠として『反逆』を参考としているが、両者の比較部分は『変革期における人間と社会』（以下『変革期』）のみの参考からもバイアスと適切な比較であったのか疑問の余地がある。

このように、1950年代に社会学者たちはオルテガをマンハイムと関連させて言及しており、社会学者らにとってはすでに馴染みのあったドイツ社会学、マンハイムとの関連がオルテガの大衆論について言及する容易さを示しているといえる。確かに、マンハイムは『変革期』で大衆社会を分析した書籍として、『反逆』をあげている。しかし、脚注において参考文献として、であり内容には言及していない（Mannheim 1940 = [1962]1966：72, 129）。くわえて、そもそもオルテガは、ドイツになじみがあるとはいえ、同時期に活躍しかつ同じ立場であると1950年代の日本の社会学者たちに目されてきたマンハイムについては、『ユートピア』の内容に少し触れた程度で深い言及は無い¹²⁾。これらのことから、マンハイムとの関連で扱う容易さと両者の概念にみられる類似性の比較がマンハイム側からのアプローチにとどまる要因となり、樺と西村（西村 1953b：5；樺 1955：8-9）にみたように、両者の関連が推測で終わらざるを得ない点でもある。

5. おわりに

以上のように、1950年代に注目して当時の社会学者がどのような観点からオルテガを捉えていたのかを、各論稿のなかに見出しその特徴を探った。そこで明らかとなったことは、その論者の大半が『反逆』に基づいて4つの特徴があげられ、かつマンハイムとの関連で言及されていたことが分かった。先行研究では、社会学者ではない研究者らによってオルテガは

“社会学者”と捉えられてきたことが紹介され、同時期の社会学者は分析対象とはなっていないかった。

しかし、1950年代に社会学者は、大衆社会論のブームといういわば時代の規定によってオルテガを大衆社会論のいち論者として論争とは切り離し学術的に捉えていた。この点については、そもそも論争の特徴が、大衆社会論をイデオロギーと関連させて日本社会に適応して成立しており、それ以前は〈翻訳・カタカナ大衆社会論〉であったため、その文脈においてオルテガは社会学者によって扱われていた、というある種の区分けが見られた。しかし、なかには50年代をとおして継続的にオルテガに言及する論者もいたが、各論者の論稿で説明にとどまり積極的に議論の俎上に載せられることは無かった。それはむしろ、〈翻訳・カタカナ大衆社会論〉を特徴としているといえるし、同時期の社会学者らがオルテガについて断片的な情報のみで正確な情報を持っていなかったことがあげられる。したがって、同時期の社会学者たちに見るオルテガについての共通認識は、貴族主義的な大衆社会論者、『反逆』の著者という側面のみであったことが分かったし、大衆社会論の隆盛という時代の規定が無ければ社会学者らのオルテガ受容も変化していたといえる。

今後の課題として、時代を拡大して分析を進め、1950年代の社会学者によるオルテガ受容との特徴に相違点があるのかどうかを明らかにしたい。

付 記

本稿は、日本大学社会学会大会（2019年7月27日）自由報告部会で発表した「日本の社会学者が捉えたオルテガ・イ・ガセットの特徴—1950年代に注目して」に加筆・修正したものである。それと同時に、拙稿（小山：2019）の第4章「日本のオルテガ受容との関連」で扱った内容について分析対象を広げ、別稿として単独に上梓したものである。したがって、拙稿（小山：2019）とは全体の論旨はもちろん異なる。

注

- 1) 辻村明は貴族主義的批判・民主主義的批判（危機）とアメリカの大衆社会論（常態）をく正統派大衆社会論とひとくくりにし、その一方で批判的なベルやJ・F・ルヴェルをく傍系の大衆社会論と紹介している（辻村 1972）。しかし、オルテガを前者のカテゴリーに分類していない。

- 2) 綿貫が前者の論者としてあげたのに、マンハイム、アレント、S・ノイマン、F・ノイマン、S・デ・グラチア、H・キャントリル、後者はミルズ、リースマンである(綿貫 1957:33)。
- 3) オルテガは「生の哲学」に影響を受けているが、〈生の理性〉はそれを独自に発展させた概念である。人間は、自らの“生”を取り巻いている環境・歴史というあらゆる可能性のなかで選択・決断して構築していくという考え方である。
- 4) オルテガを「生の哲学」の分野の哲学者として扱わなかった書籍としてTanakaは、田中晃の『生哲学』(1942)と谷川徹三の『生の哲学』(1947)をあげた。そして、1975年にO・F・ボルノーの『生の哲学』(1958 = 1975)が翻訳出版されたことで、ようやくオルテガが「生の哲学」の哲学者として紹介された(Tanaka 2007:117)。
- 5) オルテガを社会学者や社会学の観点から書かれた『反逆』の著者として紹介した論者としてTanakaがあげたのは、佐野利勝(ドイツ文学)、桑名一博(スペイン文学)、前田敬作(ドイツ文学)、杉山武(スペイン哲学・文学)、佐々木孝(スペイン哲学)、そして樺俊雄である。樺は社会学者であるが、4.3で見るとオルテガを社会学の観点から捉えるのは『反逆』の翻訳に携わった頃といえる。
- 6) 論争の発端は、1956年『思想』11月号の特集「大衆社会」に掲載された松下の論文、「大衆国家の成立とその問題性」である。
- 7) 加茂利男(1973:62)が紹介した論争の主論文、大衆社会論者側(松下圭一5本、藤田省三1本)とマルクス主義側(上田耕一郎2本、芝田進午1本、田沼肇1本、嶋崎譲1本)を対象とした。
- 8) オルテガの弟子のJulián Maríasによると、大衆概念を含む重要な概念(〈生〉〈人々〉〈遠近法〉など)はすでに1902年(19歳)に発表された最初の論考(「Glosas」)で示されている(Julián Marías [1957]1971:155)。
- 9) 佐々木基一(評論家)と佐多稲子(小説家)は座談会で、国民が1960年の日米安保条約改定反対にみる岸内閣退陣・国会解散要求という共通の課題を前にして、階級・職業・世代・性別を超えて団結したことを前提として、紙面では、そうした状況をナチス台頭前夜になぞらえファシズムが台頭するというアナロジーでもって危惧し展開したが、むしろ両者はそうした論調を危険視している(佐々木ほか1960:41)。しかし、松下の論点はまさにこの点であるし、座談会には「『大衆社会論』の〈破産宣告〉」を行った藤田省三(政治

学)も出席していた。

- 10) 辻村も大衆社会論自体が論争以前より社会学者(清水や日高)の間で話題となっていたが、論争で日本型大衆社会論の特徴については「階級社会論的大衆社会論」と複雑な特徴を持っていたことを指摘している(辻村 1972: 45-51)。その一方で奥井智之は、日本型大衆社会論の萌芽を輸入理論に先立ち戸坂潤の『日本イデオロギー論』(1935)に求めている(奥井 1990: 54-5)。
- 11) Tanakaは、『反逆』が翻訳出版された1953年に、朝鮮特需がもたらした経済発展によって現実社会が人々で埋め尽くされた光景を見て取り、『反逆』の「充滿の事実」になぞらえている(Tanaka 2007: 115)。
- 12) 管見の限りオルテガによるマンハイムへの言及は、生涯を通して『ユートピア』を参照せよ」という脚注においてのみである。そこでは、『ユートピア』の「虚偽意識の問題」でナポレオンが政敵を擲擄し「イデオログ」という言葉を用いたことや民族精神(Volksgeist)について、そして、人間の意識が存在拘束性として社会に規定されるとするマルクスの『経済学批判』の引用ヶ所など(Ortega [1930]2010: 312-3)、『ユートピア』の簡単な要約・説明といってよい。

文 献

- 芥川集一, 1957, 「マルクス主義と社会学(2) —大衆社会の問題によせて」『理想』理想社, 295: 67-78.
- 青木康容, 1982, 「大衆社会論再考」『評論・社会科学』同志社大学人文学会[編], 20: 1-27.
- 阿閉吉男, 1955, 『市民社会の系譜』培風館.
- , 1958, 「大衆化と大衆的人間」『名古屋大学文学部十周年記念論集』275-288.
- 出口剛司, 2017, 「32 大衆社会」『社会学の力 最重要概念・命題集』有斐閣, 112-115.
- 加茂利男, 1973, 「大衆社会論争—今日の時代での一考察」『現代と思想』13: 61-82.
- 権俊雄, 1953a, 「あとがき」『大衆の蜂起』創元社, 255-8.
- , 1953b, 「輿論・公衆・大衆」『神戸大学文学会研究』4: 1-13.
- , 1955, 「大衆—この怪奇なるもの」『中央評論』中央大学, 40: 7-19.
- , 1971, 「私の研究の過去と現在」『紀要 権俊雄教授定年退職記念号』

- 中央大学文学部, 60 (17) : 1-28.
- 加藤秀俊, [1957]1965, 「第3節 新しい人間像の形成」福武直編者代表『講座 社会学第7巻 大衆社会』東京大学出版, 74-93.
- 片桐雅隆, 2011, 『自己の発見 社会学史のフロンティア』世界思想社.
- 木下智統, 2012, 「日本におけるオルテガ思想の初期受容—その過程と要因に関する一考察」『金城学院大学論集. 社会科学編』9 (1) : 130-39.
- , 2013, 「日本におけるオルテガ研究の進展」『金城学院大学論集. 社会科学編』9 (2) : 94-101.
- , 2014, 「社会学におけるオルテガ」『金城学院大学論集. 社会科学編』10 (2) : 150-159.
- 児玉幹夫, 2002, 「大衆社会論以前・大衆社会論以後」関東学院大学文学部紀要 97 : 27-57.
- 小山義博, 2019, 「オルテガ・イ・ガセットに会った日本人・小島威彦、その人に見るオルテガ受容—娘の証言を手掛かりとして」『日本社会学史研究』41 : 97-117.
- 林 秀甫, 1977, 「市民民主主義への回路」『現代の眼』現代評論社, 18 (12) : 132-9.
- 日高六郎, [1957]1965, 「結びにかえて—『大衆社会』研究の方向について」福武直編者代表『講座 社会学第7巻 大衆社会』東京大学出版, 237-246.
- Marías, Julián, [1957]1971, “El hombre y La gente : la teoria de la vida social en Ortega” *Acerca de Ortega*, Madrid : Ediciones de la Revista de Occidente, S.A, 154-68.
- 西村勝彦, 1953a, 「近代社会における大衆」『近代』神戸大学『近代』発行会, 3 : 45-54.
- , 1953b, 「大衆社会とマス・コミュニケーション」『社会学評論』3 (2) : 2-13.
- , 1958, 『大衆社会論』誠信書房.
- 沼 義昭, 1960, 「大衆社会論の問題—特に日本におけるそれをめぐって」『立正大学文学部論叢』13 : 62-84.
- Mannheim, Karl, 1940, *Man and Society in an Age of Reconstruction: Studies in Modern Social Structure*, London : Routledge & Kegan (= [1962]1966, 福武直訳『変革期における人間と社会』みすず書房)
- 松下圭一, [1959]1969, 『現代政治の条件 増補版』中央公論社.

- 三上俊治, 1986, 「『大衆社会論』の系譜」『新聞学評論』35: 74-91.
- 奥井智之, 1990, 『60冊の書物による現代社会論 五つの思想の系譜』中央公論社.
- Ortega y Gasset, José, [1923]2012, “El Tema de Nuestro Tiempo,” Fundación José Ortega y Gasset ed., *Obras Completas de José Ortega y Gasset Tomo 3*, España: 559-616.
- , [1930]2010, “La Rebelión de las Masas,” Fundación José Ortega y Gasset ed., *Obras Completas de José Ortega y Gasset Tomo 4*, España: 349-528. (=1953、樺俊夫訳『大衆の蜂起』創元社)
- , [1930]2010, “Partidismo e Ideología,” Fundación José Ortega y Gasset ed., *Obras Completas de José Ortega y Gasset Tomo 4*, España: 310-13.
- 佐々木基一・藤田省三・佐多稲子・橋川文三, 1960, 「大衆の思想と行動——5.19から6.22まで」『新日本文学』新日本文学会, 157: 27-42.
- 佐々木交賢, 1956, 「大衆社会とヒューマニズムの再建」『社会学研究 特集 大衆及び大衆社会』東北大学, 12: 28-50.
- 佐藤智雄, 1954, 「大衆社会の生理と病理」『理想』理想社, 254: 1-12.
- 清水幾太郎, 1951, 「新しい群衆」『社会学評論』2(2): 2-8.
- 新明正道, 1957, 「大衆社会理論の構造—その支配的傾向」『理想』理想社, 295: 1-10.
- 武田良三, 1954, 「孤独なる群衆」『理想』理想社, 257: 18-27.
- Tanaka, Satoko, 2007, “La recepción de la obra de Ortega en Japón,” *Revista de Estudios Orteguianos*, Nº14-15: 105-123.
- 田野崎昭夫, 1956, 「大衆の形成と変容」『社会学研究 特集 大衆及び大衆社会』東北大学, 12: 66-81.
- 辻村 明, [1967]1968, 『大衆社会と社会主義社会』東京大学出版会.
- , 1972, 「大衆社会論」辻村明編『社会学講座 第13巻 現代社会論』東京大学出版会, 31-56.
- 上田耕一郎, 1960, 「大衆社会論と危機の問題」『思想』436: 16-25.
- 梅沢 孝, 1955, 「マス・ソサエティと大衆」『社会学論叢』日本大学文学部社会学研究室, 2: 1-15.
- , 1958, 「大衆の序説的考察」『社会学論叢』日本大学文学部社会学研究室, 10: 1-19.
- , 1959, 「大衆の序説的考察2」『社会学論叢』日本大学文学部社会学

研究室, 14 : 1-13.

綿貫讓治, [1957]1965, 「第1節 大衆社会における社会心理の構造」 福武直編者
代表『講座 社会學第7卷 大衆社會』東京大學出版, 27-50.